

転向の軌跡——三好十郎ノート(一)——

高橋 新太郎

前稿で、左翼運動への参加の時期を一九二三年(大正十二)の秋から冬にかけてとする、通行の「三好十郎年譜」もしくは定本と目されている『三好十郎の仕事』第一巻の「解説」の記述・判断に対して強い疑念を表明し、それを一九二六年(大正十五年)の後半から二七年(昭和二年)にかけての時期とするのが妥当であるだろうとした。この小稿では、『三好十郎著作集』全六十三巻・『三好十郎の仕事』全四巻・『三好十郎全詩集』及び、前に触れた三好まり編の「資料 三好十郎」の「年譜」未登載資料の紹介を兼ねつつ、少しく私見を補強したい。

雨が降つてゐる……

骨の中にまで雨が降る。

俺と一緒にくたくたになつた泥濘を見る。

其処には靴の跡と、下駄の跡と、足の跡だ。

俺の体の上にも足跡がある。

あゝ、大日本帝國癡狂院の

横の小路でぶつ倒れて

その足の一つ一つに

俺と悲しみと苦しみ、

隣人の悩みと呻吟。

全人類の悲哀と苦痛と病毒を

俺は見た。

白い手がヒラヒラと手まねく。

一九二五年(大正十四年)七月、恩師吉江喬松の推挽によって、右の一聯を含む詩「癡狂院清員」が『文芸日本』に発表される。翌一九二六年(大正一五年)一月には、草野心平・赤木健介・原理充雄・黄源・宮沢賢治・高橋新吉らと同人だった『銅鑼』六号に、次の聯で終る詩「Imaginationの泉——徳三」を載せ、以後『銅鑼』から離れる。

どこにゐても彼は不幸福である。
どこにゐても彼は幸福である。

彼は右手にピストルを握つてゐる。
そしてたえず何かをね

らつてゐる。いつ発射するかわからない。
何をねらつてゐる

のであらう？
自分を生むに至つた宿命の機械をか？

自分を作りあげた伝統の蜘蛛の網をか？
宇宙のどこにでも滲在してゐる自分自身

の無数の分身を
か？

それとも

眠くそびえた『組織』の保塁をか？

過剰なる想像力が彼を喜ばせる、悲しませ
る、おびやかす、

爆動する。あたまでつかちの想像力のために
彼はよろこび、

のめつて、都会の塵に疲れ果て、芥となり、
煙となり、夢と

なり、光となつて、青空へ放散する……

……
青空の銃口はすべてのものをねらつてゐる。すべてのもの

へ何時発射されるかわからない。

さらに翌二月には、左の聯を含む詩「汝等の中の枢車」を稲門の細田源吉発行・編集の『文芸行動』(三好は、犬田卯・小島勲・坪田譲治・保高德蔵・和田伝らと同人に名を連ねる)に掲げた。

この灰色に動いて行く群集の中に
一台の燦然たる自動車があつて

これも群集と同じ様に進んでゐる
金色の裝飾を重く群集の頭の上に光らせ

ゆつたりと、傲然として進んで行く
群集はこれを時々不安な眼付をして

あるひは憎悪の眼付をして、見上げる
彼等は、自分達が

この金色の自動車から支配されてゐる
ことを知つてゐる。

この自動車が
いつ自分達をひき殺すかもわからない

ことを知つてゐる、
彼等の朦朧とした頭にも

昨日、あるひは一昨日
この自動車にひかれて死んだ

彼等の母、彼等の父、彼等の愛人

そして彼等の夫、彼等の兄弟、彼等の
友人の姿が

不意に、浮び上つて来る、

しかし彼等は自分達の憎悪が

どんな結果になるかを

おぼろげながら知つてゐる

そのために再び悲しげな灰色の顔を垂
れて

足の先の路上を見つめながら前へ進む
どつ、どつ、どつ、どつ、どつ……

そして五月の『文章往来』誌上に「左翼へ行って手を握り合はうと意志する精神」を謳った「意志詩人大同団結」を
発表する。三好はここで、「正しき多数者」の幸福に行く意志」と「徹底的の社会的正義を意志する精神」とに裏付
けられた詩の出現を待望し、その大同団結をよびかける。三好は、「われらの同僚となるべき詩人」として新島榮治
・高橋新吉・ドンゾッキ・秋田雨雀・萩原恭次郎・重広虎雄・阪井徳三・壺井繁治・野村吉哉等を挙げ、また、黒
田辰男の名を挙げて「ロシア詩に対する深い理解に養はれた眼で、詩論家として世間的にも出発される事を望む」
だ。さらに八月には、「言論者と行動者」(『文章行動』)を書く。

近頃の文学者の間には、左翼的なメソドロデーと、左翼的なイデオロデーに基礎若しくは主点を置いた言論を吐
き、それを発表する人が、かなり多くなつてきた。これは、概括的に言へば、非常によろこばしい現象である。この
現象は、世間的には未だ甚だしい不遇に住んでゐる左翼作家及び批評家等を勇気づけ、間接には、文学圏外の一般左
翼人に対して力をも与へることになる。

しかし又、それがさうであればあるだけに、この現象の全部がスッカリ左翼人に取つて非常によろこばしい現象で
あるかは問題である。と言ふのは、由来日本の文学者ほど獨創性に欠けたものは他に少ない。言葉を変へて言へば、
日本の文学者ほど病的な流行好みはゐらない。自然主義が称へられると世を挙げて自然主義流行だ。ネオ・ロマンティ
ズムだ。新感覺派と言へば、それが又、金金切声をあげての歓迎を受ける。

そして現在盛んにならうとしてゐる左翼的言論も、多分、幾分はそれに類した附和雷同を含んでゐるはしないか？
少くとも、さうでないと言ひ切り得るだけの反証は、今のところ全然挙つてゐない。

といい、「左翼的実感(生活よりの真実な感情)を背景としない左翼的言論は、それが如何に最大級の修辭を以て修飾さ
れてゐても、一種の過剰物たるをまぬかれず、「実感」乃至は「生活」の裏付けのない言論は、厳密に言へば「思
想」ではなく「錯覚」だとし、その「錯覚的言論」と「自己保存的な左翼的言論」と「ヒステリックな左翼行動」と
を戒めている。へ口舌の徒」への嫌悪と、生活者の論理と実感を核とする三好の生涯を貫く姿勢は、左翼運動参入
の時機にすでに定まっていたと見てよからう。九月には、「左翼共同戦線へ向つての絶えざる突進」を指摘した詩誌
『アクション』創刊に及び、『文章戦線』誌上には「雪と血と煙草の進軍」の詩が発表されるのである。

三好十郎君が初めて『唯物神』といふ叙情篇を断続せしめた長篇詩を書いてから最早や六七年は経過してゐる。そ
の間に三好君がその出発に示した的確な現実認識と、新しいイデオロジイの把握と、そしてその両者を併せて、太
い呼吸と、新たに目醒めたるもののみ持つ爽快な調子とで表現して行く勢は、層一層確かなものとなつて来た。大
地を踏みとどろかして行くしつかりした足どりと、中途の無限の苦患と戦ひつつも、昂然と頭を高くあげて遠くを望
むその姿とは、何よりも力強い印象を人々に彫みつけずには置かぬ。これは目醒めたる無産大衆の行進の途上に於け
る姿であり、我等の詩人三好十郎君が常にその全作に於て表示する詩的事相である。

後年の第一戯曲集『炭塵』(昭和六年五月十二日、中央公論社刊)に寄せた、恩師吉江喬松の「三好十郎君の劇作」と題
した跋文の一節である。

なお、一九二六年度の三好の著作で、三好まり編の「年譜」に洩れたものに「佐藤春夫論」(『文章行動』二月号)「室
生犀屋氏に」(『文章行動』五月号)がある。また、同じく「年譜」一九二七年の項で、六月、『解放』に詩「最後の自
由」を発表。この詩はこの年の一月号『解放』に載つてゐる。というやや不分明な記述があるが、これは、『解放』
一月号が発禁処分を受けたため、削除訂正版を六月臨時号として出版したもので、三好の詩は、両誌に掲載されてい
る。年譜の登載としては、一月の項に記述するのが適當であらう。

☆訂正

前回の拙稿中、68頁16行目から17行目にかけて、「やはり、一九二六年の後半から二七年（昭和三年）にかけてのこの時期」なる記述があるが、「二七年（昭和二年にかけて）」を誤ったものである。

（次号につづく）